第3回大分市文化芸術振興プラン策定委員会概要

項　目	内　容
開催日時	平成 25 年 8 月 5 日（月）13：30～＜意見交換会＞
会　場	大分市役所議会棟　全員協議会室
出 席 者	各文化芸術団体代表者(別紙) 椋野委員長、佐藤（晃）副委員長、荒金委員、菊田委員、 後藤委員、首藤委員、八坂委員、吉田委員、玉衛教育部長、 佐藤（耕）企画部長
次　第	１　開会 ２　議題 （１）文化・芸術団体からの報告 （２）意見交換 ３　その他 （１）第 2 回策定委員会の経過について （２）「文化芸術活動に関するアンケート」について （３）次回日程について （４）その他 ４　閉会

【概要】

１．開会

■文化芸術活動団体の皆様をお招きして、活動の状況や今後の方向性について意見交換をさせていただきたいと思う。

２．委員長あいさつ

■今日は大分市文化芸術振興プランを策定するにあたり、ぜひとも実際に文化・芸術で活動しておられる団体の皆様方からいろいろお話をお聞かせ願いたいということで、大変お忙しい中、8 団体の皆様にご参加をいただいた。

■大分市文化芸術振興プランは心の豊かさが求められる一方で、地域間・都市間の競争も激化している時代にあって、市民一人ひとりの心の豊かさや人生を豊かにすることはもちろん、さらに魅力あるまちづくり、地域経済の活性化にも大きなパワーを発揮すると期待されている文化・芸術の振興について基本的な指針をまとめようとするものだ。
皆様には、活動の現状や課題、今後の抱負さらには大分市の芸術文化振興のあ

り方などを忌憚ないご意見をお話していただきたい。

■はじめにそれぞれの団体に活動状況の現状・課題・今後の活動方針等を 10 分程度でお話いただき、全ての団体のみなさまのお話が終わった後、予めお願いしていたアンケートの内容ともあわせて委員との自由な意見交換を行ってまいりたい。

3. 各団体発表

■「新潮流の会」

「新潮流の会」は歴史が長く、１９８６年にいろいろな団体の枠を越え、絵画の新しい可能性を追求したいという有志が集まり結成された。日展や二科展などの枠を越えた、全国でも活躍する実力をもった多少エリート意識もあるような人たちが集まって、権威のある展覧会をしたいということで続けている。私自身も会社を続けながら、７年前から活動し、３年前からは代表もしている。

新潮流という以上、これまでの伝統を受け継ぎながらも常に古い殻を打ち破り、新しい試みや挑戦をという形で続けている。しかしながら、作品というのはやはり皆さんに見ていただいて初めて育っていくものだと考えている。

しかしながら、実際のところ、世界中でもここ１０年、２０年、美術・アートシーンの衰退、低迷が多少あると思う。それは、作家が造り作家の周辺の人が見に来ることが多く、市民・国民への拡がりに欠けてきている点だと思う。

大分において今まで美術館に来なかった人たちにも足を運んでもらうため、５年ほど前からギャラリートークを実施し、展覧会の最終日にコピーライターの吉田寛さんを招いて、見る人の代表ということで率直な作品の感想やご意見をいただきながら、展覧会の成果を問う取組みを始めている。

また、去年は東日本大震災の後ということもあり、アフリカンサファリと協賛をさせていただいて「アニマルアート in 大分」という展覧会を企画した。動物を見て、作家が思考してそれを絵画にするということで、命の源を問いなおそうという、画家が社会に対して、どういうアピールができるかということを大分でできる形で問うたもので、大きな反響をいただき、成功に終わったと思う。

さらに、これまでにない美術館を飛び出したワークショップなどもこれから考えていきたいと思う。昨年はアフリカンサファリで作品展を開催し、夏休みには県下の子ども達に来ていただいて動物をどう描くかという絵画教室を開催

した。来年、再来年とさらに新しい試みができないかと模索しているところである。

■「ウィステリアコール」
今の上野丘高校前身の学校時代の音楽の先生をしていた『藤沼恵』が音楽部の卒業生を集めて始めたものである。先生が病に倒れられて、私が指揮をするようになってもう４４年たった。活動としては毎年定期演奏会、それから大分県合唱祭、コンクールの大分県予選、九州大会、全国大会と毎年全国大会までいっている。

もっとも成績がよかったのは、全国で金賞をいただいたことがある。昨年は新進の佐藤賢太郎さんという作曲家に新しい曲を作っていただき、児童合唱団と一緒に「ウミガメのうた」を歌ったのですが、全国の合唱コンクール歴の中でも初めての試みで、その時は銅賞をいただいた。

「ウィステリアコール」が全国に名前を知られたのは、追分節考という柴田南雄さんの作曲の作品で、それまでステージにきちんとならんで歌うという合唱だったスタイルを変え、会場の中を歩き回って長野県の民謡を主にして歌ったいわゆる「シアターピース」というスタイルを試みたからで、新聞でも取り上げていただいた。

メンバーは高校生から７０代まで本当に幅広くいろんなお仕事の方が集まっている。大体４０人前後で毎年やっている。仕事も違うメンバーが集まるのでなかなか全員では活動できず、人集めに苦労している。特に男性が少なくいつも募集している。もしお心当たりの方がいたらぜひ、舞鶴ビル６階の専用練習場で毎週月曜・木曜の夜に活動しているので、出来るだけ市民の方が参加してくれるとありがたい。

大分市歌ができて合唱曲になったときに、私たち「ウィステリアコール」が録音したものが庁内で流れていた。

■「おおいた演劇の会」
平成１８年に大分県下の劇団が「大分の演劇をもっと元気にしたい！」ということで、主に大分の県内で演劇活動している演劇人・団体で構成されて、地元の演劇の活性化と横のネットワークを持ちたいということで集まり発足した。

それに伴い、第１回演劇祭を開催した。そこで横のつながりを持つということに力を入れ、第２回演劇祭も翌年開催した。このときに九州演劇人サミットを

開催し九州の演劇人が大分に集まった。九州にとどまらず、関西の方からもお越しいただいた。その際に合同演劇祭を行い、大分の演劇人が１つの舞台を創作し「心の花」など２本を芸術会館にて上演した。

ホルトホール大分の小ホールでも開館記念公演として８月１１日に「もったいないばあばと豊の花」という作品を上演する。また、今年で 4 年目になるが、毎年夏にピースリーディング「蝉なきやまずー大分の空襲よりー」を上演しており、毎年野外でやっているのだが、今年はホルトホールの開館記念ということもあり、２２日にホルトホール大分の小ホールで行う。

ホルトホール大分ができるということになった時に、「小ホールを作る会」を「おおいた演劇の会」が中心になる形で立ち上げ署名運動などをした。これが小ホールを造るという一つの流れになったのではないかと思う。おかげ様で素敵なホールができ、そこで開館記念の作品を上演させていただくということで、とても光栄に思っている。

「おおいた演劇の会」ということで、何か作品を作るときはともかく「大分」ということにこだわっている。

今後は、演劇の活性化はもちろんのこと、横のつながり、ということに加えて裾野を広げていきたいということで、今回１１日の公演については、オーディションを行い一般から公募して出演者１６名のうち約半数が舞台経験のない方が始めて舞台に立つ。演劇の面白さ、楽しさを知っていただいてこれからも色んな意味で力を貸していただければと思っている。

■津留地区　津留芸能協会

津留地区は大分川から裏川までの中洲であり、岩田町から海まで、約８００世帯がある。その中で昭和５８年に、当時の市長から「芸能文化のために協会を作り、華々しく活躍しませんか」というお話があり、当時の方々が芸能協会を立ち上げた。

現在は、津留地区の少年少女を対象に公民館等で活動をしている。約１０名～１５名の小学生に民謡を通じて伝統芸能を普及する、継承するという活動をしている。それと同時に、高齢者を対象に「ふれあい健康講座」を開催し、高齢者も大きな声を出して民謡を歌おうという取組みをしている。これも始めて１５年ぐらいになるが、この他にも福祉施設への慰問を毎年４０箇所以上に行っている。

今後の活動に関しては、少子高齢化で高齢者福祉施設が増加しており、その施設に芸能慰問をしたいと考えている。

また、民謡については、「津留芸能協会」の中でも「萬謡会」中心になって活動しているが、民謡を通じて広く芸能の文化を育成し、啓発していきたいと考える。

■大分トリニータ後援会

２００４年に、当時の中津江村の坂本村長さんを初代会長として設立された。基本的には、大分トリニータの物心両面からの支援をするために設立されている。

取り組みとしては、大分銀行ドームであるホームゲームの際に、後援会ブースを設置し、取組みの広がりを目指すほか、ベルマークを収集し日本赤十字に送る活動をしている。また昨年の件の西北部での災害時には、竹田市、日田市、中津市には選手のサイン等を入れた激励旗を送らせていただいた。

また、大分トリニータが行う活動で、県内の子どもさんたちのための巡回指導や地域貢献の活動、選手派遣に関しては後援会が支援している。

後援会の組織としては、県内１７市町村に支部があり、企業を中心とした職域支部が１２支部ある。その各支部の方々は地域でのお祭りや、いろいろな催物等に参加をしている。その時に選手派遣や物心両面からの支援といった活動を続けている。

■社会福祉法人　暁雲福祉会「ウィンド」

１９８１年の国際障害者年から知的障害者福祉に携わっている。１９９０年代に私がアメリカでマネジメントの勉強をさせていただいたときに、ニューヨークのスラム街でエイズに罹患されたドラッグ中毒の方が仕事をされている施設があった。とても笑顔になれないような状況の施設だと思っていたが、みなさんが生き生きと暮らされていた。エイズでどれくらい生きられるかわからない、黒人で低所得の方が集まられた施設だったのだが、そこで導入されられていたのが芸術療法、絵によるあるいは音楽によるセラピーだった。

１９９０年代から私どもも、ミュージックセラピーとアートセラピーを導入している。現在音楽療法は週に２回、絵画セラピーは月に２回行っている。専門のコーチ、施設の職員、知的障害のある利用者さんたちと行っている。

２００７年には、『いい音はみんなの心に響くコンサート』を開催した。これは２００６年に、『障害者自立支援法』というとても課題の多い法律が施行され、それに対して障害のある人たちのことを、わかっていただきたいという思いで、「ウィンドアンサンブル荷揚」の小学生の子どもたち、地元の音楽家の方たちとグランシアタでステージをさせていただいた。

２００８年に秋葉原での悲惨な事件があったときも、障害がある方もない方もお年よりもお子さんも、みなさん同じだとわかっていただきたいということで『命の作法』というドキュメンタリー映画を上映した。

直近では２０１１年、東日本大震災の発生をうけまして防災シンポジウムの第１部のなかで、知的障害のある方たちの朗読を中心に『葉っぱのフレディ』という哲学的絵本の朗読劇を上映させていただいた。

私どもが音楽療法や絵画療法を含めて、それぞれにリズムがあり、それぞれに表現があることを見出したときに、その手法と共にその時々の社会的課題に対して、共に一般市民・県民の方と考えあえるような企画を今後も続けて参りたいと考えている。

■鶴崎おどり保存会

大友宗麟の時代から踊り継がれている「鶴崎踊り」には２種類の踊りがあり、昭和６１年に国指定の無形文化財に選択された。
これより前、これは大正１２年に、昭和皇后になられます久邇宮良子女王殿下が大分県を訪問された際に、地域の踊りということで「鶴崎踊り」を披露したのが、全国に広まった契機であった。翌年大正１３年には保存会が発足し、まもなく９０年となり、私が１６代目の会長となる。

地域では毎年８月の盆あとの土日に「鶴崎踊大会」を開催している。保存会の中には研修部と広報部があり、研修部は年間通じて毎月５の付く日に練習を重ねながら地域の踊りや太鼓を習いたい方々と共に活動に取り組んでいる。

今年は２月２３日～２５日に「第１３回地域伝統芸能祭り」が東京のＮＨＫホールで開催され、「鶴崎踊り」を披露した。また、大分県を代表する豊後高田の「草地踊り」、津久見の「扇子踊り」、大分市の佐賀関の「関の鯛つり踊り」と私どもの「鶴崎踊り」の４団体が連携し、平成１７年から郷土芸能文化交流として各地区を回って公演を行っており、今年は、８月３日にＯＢＳ納涼広場の会場の若草公園で披露した。４団体が一堂に会しておどりを多くの人に観て

もらう取組みを継続している。

また、「鶴崎おどり」は歴史があるので、長い間に踊りも変わってしまうのではないかという心配があり、一昨年研修部、地域のお年寄りを含めて、本来の鶴崎おどりとして『基本型』をＤＶＤ化した。「鶴崎踊り」をしっかりと保存・継承するために、毎週月曜日の放課後に鶴崎小学校の低学年２４～２５人と研修部のメンバーが踊りの練習をしている。

ＤＶＤの作成にあたっては、大分市の情報学習センターのスタジオで職員、ボランティアの協力も得て、通常２０００円ほどの経費がかかるところを３００円でできた。

今後の活動としては、研修部は年間 5 の付く日の練習と、それぞれの地域の小学校の運動会や敬老会等での活動を通して、多くの方々に宣伝をしていきたいと思っている。

また、今年から８月１２日には、ＪＲ大分駅主催の供養踊りをやりたいという話があり、上野の森口に小さな櫓も建て、これから毎年やっていくということなので、囃子と踊り子、そして子どもたちも一緒に参加するなど、鶴崎踊りを鶴崎だけでなく、多くの方に見てもらうために、いろんなところに出向いて普及していきたい。

私が小さいときには大分郡の地域はみな「鶴崎踊り」を踊っていた。湯布院から湯平から挾間から庄内…。またそのようになればいいなと思う。

■(株)ザ・グラウンドノイズ／ザ・ブリッジ
大分県湯布院にてギャラリーを２２年ほど経営している。由布院駅のギャラリーもＪＲ九州さんと、由布市に出資していただいて、現在２０名のアート団体があるが、そこの代表も務めている。別府の方では別府プロジェクトの副代表をしている。大分市は出身地である。

湯布院や別府ではアートツーリズムを中心に文化支援活動に取り組んでいるが、大分では市民中心型の、ママたちが日常的にアートに触れたり、また、自分で何かをやりたいという人たち、いわゆるイノベーターがチャレンジできたりする空間を日常的につくりたいと思い、フンドーキンさんに交渉させていただいて、倉庫をお借りした。

この「ザ・ブリッジ」では、芸術文化や音楽活動などの場を提供するとともに、料理の野菜も有機野菜を使っている。

日常的に大分の良いものを発信できるような場所で、みなさんに提供する側の人たちも社員として一生の仕事として取り組めるような環境づくりをしたいと思い、株式会社として設立し、大分大学からも新卒で採用しており、若い方もすごくがんばっている。

広さは２００平米ほどある。７０平米をオルターナティブスペース、多目的という形でみなさんに無料で開放し、演劇、展覧会、東日本震災の復興イベントなどをさせていただいたりしている。これらは「ザ・ブリッジ」が主催ではなく、自分が何かをやりたいという方に、場所と集客をこちらで提供する。一緒に取り組んでいこうというような会場としている。

ギャラリーも２スペースあり、２週間交代で作家さんが入れ替わっている。こちらも無料で開放しており、大体５０席ぐらいあるが、カフェでは大分の有機野菜を使った、家庭的な料理を出して、本がたくさんあり、ブックカフェという形式で、本を読む方もいらっしゃったり、お酒を飲む方もいたりする。

日常的にカフェを利用するほか、結婚式の二次会で利用する、ということをしながら、ギャラリーで普通に絵を見たり、アートに触れたりという環境づくりを進めている。

これからの活動だが、会場を市民のみなさんに無料でお貸ししている形だが、自主企画としてはアートマネージメントを学ぶという形で現代美術講座を開催している。日本でいう美術評論家の第一人者である、さわざきのり（？）さん、１９６０年代にネオダダという動きがあったのだが、その旗手の篠原有司男さんなどに来ていただいて、いろんなお話をしていただくということをやっている。

現在大分市美術館、草間彌生スタジオと連携し、１９６８年にニューヨークでの『ハプニング』という草間彌生さんのファッション写真展を開催している。これは大分市美術館との連携のサテライト展示という形だ。この先１２月に新県立美術館との連携のイベントも開催する予定となっている。

また、１０月には、大分市内の中心市街地を活動拠点とする、アート NPO 法人をたちあげる準備をしている。そちらでも新たな芸術文化、音楽を中心として街の中のいろいろな仕掛けを展開していこうと思っている。さらにそちらで

も人材の育成・雇用を作っていけたらと考えている。

現在、１０月にフンドーキン倉庫さんの目の前にフンドーキンマンションという使っていないマンションがあるが、先般そちらを借りた。それをどういう形でやっていくかということは、これから考えていくところ。

4. 意見交換会

◇委員
（アンケートの中の１９番について、おおいた演劇の会のみなさんに質問。）
芸術会館のように地元の表現者の育成の場となるとあるが、具体的に芸術会館がどういった取り組みをされていたのか、教えてほしい。

■おおいた演劇の会
聞いた話となるが、芸術会館は例えば大きな事業としては「創作実験劇場」という地元の劇団員の育成のための活動をしていた。つまり、作品を作る場を提供して、劇団が自分たちで作品はつくって持っていくのだが、チケッティングのほか、いわば「小屋を貸してくれる」「機材を使わせてくれる」、そこで劇団員達にノウハウを覚えてもらう…経験をつんでもらう。

それぞれの劇団にとって、その当時はそこが目標となって、いつもできないものが作れるということで、各劇団のスキルアップのための活動であったと聞く。創作実験劇場がだんだんと資金面でも難しくなる中、芸術会館がなくなる前は、高文連の演劇祭に使われるようになったのだが、それまでは地元の劇団の創作の場とさせていただいていた、と聞く。

また芸術会館はスタッフが充実していて、照明、音響などたくさんのことを地元の劇団員に教えてくれた。例えば舞台裏ワークショップなども開催してくれて、劇団員が舞台裏まで勉強できて、自分たちの公演のスキルアップにつないでいける活動をしてくださいっていたと聞いている。

◇委員
専門のテクニカルのプロパーの方がいらっしゃったということ？

■「おおいた演劇の会」
そうです、芸術会館にはいらっしゃいました。

◇委員

「ウィンド」の代表の方へ質問します。障害をもたれた方々と１年を通して何回か、大きな会場で皆さんに見ていただくものをつくりあげてらっしゃると思う。日常で特別な練習をして、その発表までもっていっているのか？

■「ウィンド」

大きな公演は１年に１回まではやっていないが、週２回の音楽療法も、時間の半分以上はセラピーである。コンサートのための時間は、まず企画して、そのなかであり方を考えながら、どのくらい前から練習すればいい、ということを考えてやっている。

◇委員

私も、数年前に辞めたが、十年近く自閉症の方々と何かの発表の場をもつということでやっていたが、ダンスならダンス、歌なら歌、リズム楽器ならリズム楽器とやることを決めて１年間同じものを目標に向かってやるという形でやってきたが、結構いろんなものがあって、下は小学生、上は４０歳くらいまでのいろいろな方がいた。それを１つにまとめる大変さがあった。実際に取り組むとたくさんの大変なことがあると思うが、ぜひ、みんなとつながっていくというこういう会はずっと続けていただきたい。

■「ウィンド」

まとめるという意識はあまりなかった。絵画などでは、アールグリッド（気の芸術）（？）、教育を受けず教えてもらったこともない非常に優れた画家たちが障害者のなかから出てきている。音に関しても似たようなことが言える。楽譜があるわけではなく、その方たちがつむぎだす音について、サポーターたちが枠組みを作っていく形なので、本人達はレッスンのときも、グランシアタのステージの上でもあんまり変わらない。それを支え、一緒に楽しんでいく、そういう仲間たちがありがたいことにいるということに尽きると思う。

◇委員

スポーツ文化について、トリニータ甲斐さんにお尋ねします。

「大分市が文化的な街と感じますか」という問いに関して「どちらともいえない」というお答えですが、私たちが委員会のなかでもスポーツ文化の扱いに迷っていた部分もあり、スポーツ文化という点において「大分市が文化的な街と感じますか」という問いに関して「どちらともいえない」とお答えの理由と、応援で各地の街に行かれているの思うので、そのなかで「この街はスポーツ文化が盛んだな」と感じた街がもしあれば場所と理由などもお聞かせいただきたい。

■「大分トリニータ後援会」
どちらともいえないという答えは、「文化的である・ない」をどの辺で線引きしていいかわからなかったため。文化的にスポーツの方から考えると、１つは施設かなと思うが、どの辺で「文化的か」考えるのか分からないから「どちらでもない」とした。

大分の場合はサッカーの場合、子どもたちの遊ぶ公園、場所は結構ある。バスケット、外のスポーツになるとどうなのかはわからない。サッカーで言えば、大分は非常に施設的には恵まれていると思う。２００２年のワールドカップを大分で開催できたことで、日本協会や、国の補助、県・市の補助をいただいて、各地で人工芝グラウンドができている。これはサッカーだけでなくいろんなスポーツで使っていただいていて、そういった面からは大分は非常に進んでいると思う。

ただ、大分県の場合交通の便が悪い。例えば大銀ドームも１～２万人入ると大渋滞してしまう。福岡、東京、広島の場合そのような渋滞はあまり見られない。その辺も配慮された設計になっている。こういったこともあって「どちらともいえない」とさせていただきました。

また、やっぱり高校などのスポーツが盛んな静岡などは空気が全然違う。グラウンドも違ってくるし、市民の考え方もチームに向いている。その分、厳しい目も持っている。グラウンドだとか、応援の仕方だとか、いろんなものに厳しい目は向けられる。特に静岡へ行くと、チームの勝ち負けだけではなく、ゲームの内容やゲームの中での選手の動きなどで、色んな応援の仕方を変えてくるとか、その辺も文化だと思う。それは大分ではまだまだワールドカップ開催から１０年ぐらいでありますので、後進であると思う。

◇委員
私として、何ができるか考えた。大分市民合唱団の方、素晴らしいのは会場と一体となったという点。「底辺を広げる」というのは会員を広げることや、合唱を聴いて感動する人を広げることだと思った。私ども自治会としても、社会福祉協議会、ロータリー、公民館など、すそ野を広げるために役に立つことがあれば協力していきたい。色んな部分から大分の発信をしていきたい。

■「ウィステリアコール」
普段歌と関係ないような方でもいざ歌うと、みなさん歌が好きなんだなあ、と思う。地区の集まりで一度一緒に歌ったときに、みなさんとても喜んでお歌いになる。童謡、唱歌を歌う会もしているが、１時間半歌い続けてみなさん気持ちよく帰られる。もっとたくさんの方に歌ってほしい。合唱団ときくと難しそうに聞こ

えるが、みなさんいつの間にか歌えるようになる。ぜひ一度足を運んでみてください。

◇委員
「ザ・ブリッジ」さんに質問。
会場で皆さんが行っている活動の状況は一般の方にどのように紹介されているかお伺いしたい。一番大切なことはこうした活動が日常の生活の中にあることだと思うのでお尋ねしたい。

■「ザ・ブリッジ」
大分合同新聞社さんなどの各新聞社さん、ホームページ、フェイスブック、ツイッター、カフェに来られたお客さんにお渡しするチラシ、そしてクチコミで周知している。

◇委員
女性ですと、お子さんを育てるのに忙しい時期に、気楽に自分たちの生活に身近に文化芸術を感じながら出かけていける場所があるのはとても大事なことだと思う。芸術活動をしたくて、勉強されている方がそれを職業として続けていける方はなかなかいない。芸術に関われる仕事をたくさん探していただいて、ぜひ希望ができるようになればいいと思う。

■「ザ・ブリッジ」
まだここでは詳しく言えませんが、大分の作家さんを関東の方へ具体的に支援できるような仕組みづくりが大きな規模で動いている。これがうまく稼動すればいいと思っている。しかし、自分たちが作家を育てることができるとは思っていない。歌も演劇もそうであるが個人の努力があって、こちらがそれを引き上げるということしかできない。街そのものが、作家さんが頑張れる環境、空気であることも大切である。
こうした環境の中では、ちょっと突出した作家さんは飛び出していくことが可能になると思うので、自分も頑張るが大分市にもよろしくお願いしたい。

◇委員
今日は沢山の方面の方から色んな話を聞けて勉強になった。「ザ・ブリッジ」さんに別府と湯布院の違いや、大分の作家さん達の違っている部分などがあれば教えてほしい。

■「ザ・ブリッジ」
芸術も文化も同じとは思うが、その地域の良さや特色が反映されると思う。湯布

院という場所は年間３５０万人のお客さんが来られる観光地で、由布院駅は１日２０００人が利用するという環境である。色んな方にプロモーションができる場所である。湯布院の特色として、よそから移り住んでそこで一生を過ごしで制作していこうとする人々がたくさんいる。アートでまちづくりというのは、観光協会とは進めているが市民の手でというのは感じられない。みなさん自分の生活スタイルを大事にしている。
別府に関しては日本でも有数の昔ながらの観光地なので、昭和の町、歴史・文化なども少し特殊な環境である。アーティストが別府に来るとモチベーションがあがると聞く。体験したことのない環境を体験されるという点では、新しい技術が創出される場ではあるが、湯布院のように定住の場にはならない。
大分市では今現在は、「ザ・ブリッジ」でいろんなイベントの支援をしている。先日ニシノアキヒロ（キングコング）の展覧会とトークイベントを開催した。中高生が２００人ほど来られた。
市民の方たちが、すごく生活レベルで動いている。湯布院は観光客ばかり、大分はまだ観光客の数は少ないが、市民の方たちがとてもアンテナを高くしているし、センスもいいし、文化的に潜在能力があると思う。アンテナを立ててる方たちは、よく動かれている。
大分市は、市民の方にすごく可能性を感じるし、ホワイトキューブ（白い箱）のように感じる。湯布院＝観光地、別府＝温泉となる場合、大分とはとなる場合、イメージ的にはホワイトキューブという感じ。可能性がありみんなの感性を現実にしやすい街であるから、市民の皆さんが使いやすい「ザ・ブリッジ」を展開していこうとしている。

■「新潮流の会」
画家の集まりが、企画をして展覧会をする。普段、美術展というのは美術館が比較的過去のもの、成果をあげたもの評価されたものを展示する。私たちは、大分の地で高い志を持った画家が集まっている。こうしたライブのアーティストの集団の「今」を見てもらいたい。しかしながら日常的に文化的に普及するのはすごく困難なこと。その困難を克服して、突破していく為にコピーライターの吉田さんをお呼びした。
いろいろな形もあろうかとは思うが、「新潮流の会」が目指すものはファッション的なカジュアルなアートを目指しているものと、微妙な違いがある。
日常で楽しむのは大いに結構なことであり、それぞれが目指すものが、有機的につながっていくことは、大分の文化・芸術の振興のために大きな課題であると思うし、それができれば立体的な芸術文化が大分の地から誕生し育って広がっていくことになる。

◇委員長

今のお話は「ザ・ブリッジ」のようないわゆるカジュアルな方との連携をおっしゃっていただきましたが、例えば地域で取り組んでおられる方、障害がある方と取り組んでおられる方、公民館活動として取り組んでいらっしゃる方などとは、立体的にするという意味で連携できると思われるか。

■「新潮流の会」

私たちは美術館の中、自分のアトリエだけでは非常にもったいないと思っている。そういう意味で広く、昨年のアフリカンサファリとの活動も面白かった。もちろんこちらからアピールしていかなければならないが、お声をかけていただけるといい。絵画の力、魅力、芸術の豊かさを子ども達、障害をもつ方たちに知って欲しい。アートセラピーはドイツでも実際にある。私も趣味で絵画占いをするのだが、絵を描くとその人の個性や性格が出るような気がする。作品に表れる作家の精神性は、初心者でもゴッホでもピカソでも同じで、その純度が高いから世界中の美術館で作品を見ると感動するんだろうと思う。私たちは、ゴッホやピカソとつながっている。とても遠い存在ではあるけれどつながっているという感動を子どもたちや障害を持った方に伝えていきたいと思っている。

◇委員

最初のお話で、エリート意識もあるとおっしゃっていた。昨年実際に展示をみて、本当にレベルの高いものだと思った。ほとんどプロとして活動されている方が多いが、よく若手の支援ということで行政が場所を提供すると思うが「販売できない」という問題があると思う。「新潮流の会」として、作品の販売に取り組んでいることはあるのか？

■「新潮流の会」

アートマネージメントのことと思うが、最近国内でも取り上げられてはいる。作家が作品を販売するというのは、作家個々のカテゴリーになると思う。全体としてとなると、ハードルが高い。むしろ発表の機会や広報などで協力をお願いしたい。

「新潮流の会」では再来年、ニューヨークで発表したいという思いもある。
作家個人のモチベーションを高めるためにもこうしたことに取り組んで行きたいと思っている。また、東京などの県外から、似たような志を持っているレベルの高い作家を招聘するということもしていきたい。

これは美術館の範疇になるかもしれないが、先ほども言ったように美術館はクオリティの確かめられたものしか展示できない。そのちょっと手前にある作家はな

かなか美術館としては難しい。そういう意味で支援をいただければ、美術に限ることなく、私たちと同時代の活動家への支援ということで、全国にもあまり例のない取組みとなるのではないかと思う。

■ウィンド
話が戻るが、大分市文化芸術振興プラン策定委員会について今回初めてお話を伺った。この策定委員会が文化・芸術をどのように定義づけてられているか全く分からなかったのだが。この委員会の『文化・芸術』の定義をお教えいただきたい。

◇事務局
文化・芸術の部分を様々な分野から広く捉えるなかで、まとめていこうと考えている。今回はその過程で、文化芸術活動団体のみなさんのご意見を伺おうという機会であり、それぞれの思いの中で自由にご発言、ご回答いただきたいと考えている。

◇委員長
個々の委員はそれぞれの想いがあるとは思うが、とにかく対象を狭めずに考えていくといった形で進めている。

◇副委員長
「おおいた演劇の会」、「津留地区の津留芸能協会」、「鶴崎おどり保存の会」のみなさんにお尋ねする。文化・芸術を振興するなかで新しいメンバーの確保、後継者の育成などが大変だとは思うが、その課題に対して工夫している点をお教えいただきたい。

■「おおいた演劇の会」
厳しい社会情勢のなかで、みんなで活動する時間帯をとることがなかなか難しい。数年前には、午後６時には練習が始められていたが現在は午後７時、８時などに下がっている。
また、演劇も男性が少ない。ほかには３０代、４０代、つまり、働き盛りで、家庭を守っていく世代が欠落している。平均年齢７０歳という劇団などもある。
それでも、演劇をやってみたいという人はいるので、そういう人を発掘するために、昨年公民館で子ども向けにワークショップをした。今度その大南公民館で、劇団を立ち上げることになりおおいた演劇の会から講師を派遣することになっている。
他にはオーディションを行う。公募をして、来ていただいた方に、練習は厳しいと思うが「舞台に立つ」ということを目標に、頑張っていただきたいと思う。
今後は、ホールだけではなく、「ザ・ブリッジ」さんやライブハウスみたいな小

さな所でも開催していきたい。

■「津留地区の津留芸能協会」

ここ１０年来、まったく人員が増えていないし、その会員が高齢化している。人員の補充はなかなか思うようにいかないが、公民館活動の一環として津留芸能協会は活動している。その活動のなかで、見る相手に喜び、楽しさを与えていると思っている。参加してよかったと思うことで、また続けていこうという積極的な思いもでてくる。

少子高齢化で、どんどん老人施設が増えるなかで、施設の方から公演依頼の連絡もある。協会では把握できないので、市からまとめて教えていただきたい。また、大分市が施設慰問をする芸能協会にはこういう団体がありますよということを施設に対して知らせて欲しい。

■鶴崎おどり保存会

私ども保存会の研修部は毎月５のつく日に練習しているが、その練習日を変えてみようという試みがあった。毎回お囃子と踊りが一緒に練習をしていたが、月２回はそれぞれのパートに分かれて練習することにした。そうすることで、若手が３名ほど入ってきた。

若手の確保について、各自治会にもお願いをするなど、その辺をもう少し強化していきたい。

小学校も踊りクラブができたし、中学３年生も大会に参加するために、全員ではないが土曜日に校区公民館に集まって練習している。高校は鶴崎高校、情報科学高校、鶴崎工業などにも声をかけて出てもらうようにしている。

鶴崎踊りは踊り自体がゆっくりしているので、６０代、７０代の皆さんに健康づくりの一環として踊ってもらってもよいと思う。

以前お金をかけて「ミス鶴崎おどり」を１０名選んで、副賞にグアム旅行などをつけて、１年間、観光大使のように働いてもらったこともある。しかし、１年過ぎるとみなさん続かないので、投資の価値がないということで辞めている。お囃子の三味線の方は今ブームのようで、若い男性も入ってきている。

◇委員

大分トリニータ後援会は、会員獲得が大きな課題だと思う。会員が増えれば増えるほど、活動内容も広がってくると思う。アンケートの中でも、行政との連携とあるが、今年から大分市役所も支部を立ち上げましたが、会員獲得のため行政とどのような連携をとるのか、お考えをお聞かせ願いたい。

■「大分トリニータ後援会」

今年の１０月末から募集に入る予定にしている。一般会員の方は、今年約６３００人。全国的に見ると北海道、沖縄をのぞいて約２０００人の近くの方が入会しているがフォローができていない。毎年郵便で申し込みしていただけるが、全国に散らばった方々には通常の会員証をお渡しするしかできない。

また、行政で担当される方は、最初はトリニータやサッカーが大好きな方が担当になっていただいていたが、３～４年たつと人事異動があり、そのまま右肩下がりで、というのが１０年目の現状である。

我々が足を運び行政の方と話し合いながら進めていかなければならないが、今対策を持ち合わせていない。

またチームも5連敗しており、こうなると来年の会員数はいっぺんに落ちてしまう。特に気になるのは一般会員さんたちである。それをどう繋ぎ止めるかが大きな課題であるが、大変申し訳ないが明確なお答えができない。

◇委員

今、お話をきかせていただき、それぞれの団体の方では自助努力されているとわかった。今後どうあって欲しいかということをアンケートで見ると、今後の資金的援助による活動の支援や提供、また施設の整備といった項目が多いが、具体的にどういう内容が必要なのか、大分らしい文化、芸術の振興発展という観点からみた場合、自身の団体に関係することでも、関係しないことでもかまわないので、一番大事なものは、一言でいうならば何と思われるかご意見を聞かせていただきたい。

■「おおいた演劇の会」

大分は、西洋演劇発祥の地、西洋医学発祥の地、西洋音楽発祥の地、そういうものを掲げて、この大分市としてそこにある団体としてどうあるべきか。

何年か前に大分市が第一回南蛮文化祭を開催したが、それ以降開催されていない。結局、打ち上げ花火が上がっただけで、その後が続かないというのが、私ども団体の感じる印象である。その時に市から頼まれて、フランシスコ・ザビエル生誕１００年ということで、大分の各団体を集めて一本のお芝居を作ったが、そのときの横のつながりがすごかった。コンパルホールで行い参加団体が１０ほどあり、出演者が約２００名いた。

そういうきっかけを作ってくれるのが大事だと思う。これは個々の劇団ではできないことだと思う。

また、最近、コラボという言葉が良く使われるが、例えば演劇と書道や音楽など他のジャンルとのコラボが可能である。

大分だからできる大分方式で、各横の団体が一緒になって一つのことを作り上げることで、そこからネットワークが広がり、そこを見に来たお客様が他のジャン

ルの文化芸術を観ることによってまた広がり、個々の団体だけではできないものがたくさんの団体が集まればできるようになる。
それを観た市民が、大分はこんなに素晴らしいことがあるのだと、こんな素晴らしい人々がいたのだと思えるような場を作っていただければ、もっともっと繋がっていくのではないかと思う。
それに私ども文化団体、芸術団体がどれだけの努力ができるのが大事なのではないかと思う。

■「新潮流の会」
今すぐ出来ることと中期・長期的なことがあると思う。文化や芸術は、５０年１００年、もっと言うと２００年３００年かけて形成されたものである。
時間軸を考えるときに、私から個人的に言えるのは、小学校の６年間に本物の美術や芸術、音楽を教える専門の先生が少ないと思う。中学校でアンケートをとると小学校６年間の間に美術が嫌いになったという生徒が、大体１割前後いる。また中学・高校と受験などあって、大人になった時に美術というものと距離ができてしまう。美術に限ったことではないが、今出来ることとして、これから大人になっている小学生たちの日常の授業の中に、美術や音楽などの芸術に週一回でも触れさせる機会があると将来的に良いのではないかと思っている。

■「ウィステリア」
なにが一番欲しいかと言うと、人が欲しい。昔に比べ今は皆忙しい。仕事をしている人は残業が続き、子どももとても忙しい。せっかく上手になってきたと思っていると、親から勉強とコーラスのどちらが大事なのかと迫られ、結局コーラスをやめてしまう。
また、大分と他県の小中高のレベルを比べると、大分はうんと低い。
「ウィステリア」は、一般の部ではいつも全国に行き、銀賞・銅賞などのレベルでやってきたが、中学・高校はなかなか九州大会に行っても良い成績が取れない。熊本や宮崎は、私が高校生の時から同じ高校がずっと金賞を取り続けている。そうした学校は先生が転勤になっても、しっかりその後を受け継いでいく先生が赴任する。大分は、せっかく銀賞・金賞レベルに上がってきたかとなっても、その先生が転任し、新たに来る先生はコーラスの経験の無い方が来て、レベルが落ちるということの繰り返しである。教育委員会はそういう継続性を考えて欲しい。熊本の場合は、そこで学んだ生徒が先生になって帰ってきている。だから、良い指導者が沢山いて、あちらこちらでレベルが上がってきている。大分をみるとそこが弱い。
この前ホルトホールの大分市１００年の記念の演奏会があり、集まった第九を唄う合唱団が大分市歌を歌い、その後の会で、大分大学の学長さんが「私は、大分に来て３８年になるけれど、大分市歌を初めて聞きました。」とおっしゃった。

もっとそういうのを広めて、「私は大分市民です」と、威張って大分市歌を歌える人が出て欲しいと思う。
そういうことのために、お役に立てば何でもさせていただきます。

■「津留地区芸能協会」
津留地区には、甚吉という孝行少年がいてモニュメントがある。津留地区の中で、その孝行少年を称える歌・踊りを作成している。これを小学校に持ち込みますと、踊り・歌を誰も知らない。先程のお話のように、大分市歌を聴いたことも無く、「そんな歌があったのか」という程度である。
我々も、意識が足りないという気もするが、その甚吉音頭と甚吉踊りを広めようと津留小学校と舞鶴小学校の二校に、芸能協会から指導に行くが、子どもたちはそのときだけは真剣にやっている。しかし、いざ披露する場になると誰も来ない。せっかく指導しても、継承されないという現象がある。

■「大分トリニータ後援会」
会員数も多いが脆弱な組織である。チームの成績にも影響される。大分ＦＣにはシーズンパス等があり、年間約７０００枚の売り上げがある。シーズンパスの場合は試合観戦に行くことができるが、後援会に加入したからといって、実は何も無い。会員証も無く、大分トリニータを財政支援しているという自己満足でしかない。
非常に危ない土台であり、その後援会をいかに作り上げていくか、これからの大きな課題である。
トリニータ自身は、大分県の大きな財産だと私たちも思っており、子どもたちの夢でもあり、無くしたくないと。そういう形からも、ぜひ頑張っていきますのでどうかお願いしたい。

■「ウィンド」
大分にどのような文化があるかという、とても大きな質問をされたが、私は以前に大分県内の先覚者に学ぶというコンクールに関わらせていただいたが、１年ほどで終わった。それが１年でなぜ終わったかというと、古文書や非常に難しい本ばかりで、子どもたちが読む本が無かったからである。翌年は白波学習コンクールに変わってしまっていた。
打ち上げ花火という話があったが、作り上げるためには年数がいるが、１年であきらめて欲しくないという気持ちである。
また、先覚者に学ぶとコンクールと今申しあげたが、これまで大分市の文化を作り上げた先人たちがいる。今の大分市は今できたわけではない。
大分市民のアイデンティティーが語れるようになるには、子どもも大人も「今」行っていることを大切にするとともに、これまでの大分市はどうやって創りあげ

られたかということをしっかり踏まえた長期計画が必要なのではないかと思う。

■「鶴崎おどり保存会」

私どもは鶴崎おどりを継承していくが、市の財政課は、今年も１００万削るといった話がきている。文化・芸能を育てていくためには予算確保について、しっかりとお願いしたい。

もう一点、大分銀行ドームをもっと文化芸術に使いたいと思う。できれば、鶴崎踊りをここでしたいと思っている。あそこなら雨は関係ないので旅行会社や観光団体に、ぜひ２日間あるので来てくれとＰＲできる。

しかし、昼間は、別府や大分を観光し、夜は鶴崎踊りをここで見てくださいというには、やはり場所が大きすぎる。

ならば、私が最初に言ったように大分県の芸能４団体が毎年回って行っているイベントを、雨に強い大銀ドームで開催してはどうか。鶴崎踊りにトリニータさんヒートデビルズさんの選手など沢山参加してもらって開催したい。

ドームの担当者と話すと、芝を傷めると大変などと言われるが、県内外からのアクセスの良い大銀ドームを、大分市の観光振興のためにも、文化・芸能をリードする施設として活用することをお願いする。

■「ザ・ブリッジ」

このアンケートの１９番の資金的援助に関する具体的な希望は、少ない金額でも良いので、継続可能であり、それでいて街の問題点が文化に対する起爆剤になりうる団体への長期的支援が重要だと思う。最近は現代美術というものが、新しい価値観を人に気付いてもらえる一つの「しかけ」として使われることも多くある。そういう意味で、芸術・文化を街に導入すると全国的に世界的に共通していることだと思う。

そこですごく重要なのは、選定する目だと思う。結局、正しいものを選択するかどうかだと思うので、その辺の判断は皆様にお任せする。本当にこの団体は根本的に物を変えてくれる、しっかりやっていけるというものをきちんと判断していただき、そこにきちんと話し合いがあると嬉しい。

４に関する情報提供においては、やはりメディアとの連携だと思う。いわゆる大分合同新聞さん等の新聞やテレビもそうであるが、いつ広げても芸術・文化のことが優先的に書かれているとイメージとしては一つの都市の価値になると思われる。

１３番の施設設備の充実については、設備というのは例えば設備がよければそれなりに使えるし、なければそれなりに知恵をしぼって使えるので、必要なのはそこにいる人であると思う。

例えば大分市美術館であれば、館長や学芸員、広報担当者がいい判断をする方であれば、我ら民間としては連携が取りやすくなる。そこでどんな展覧会が開催さ

れるかによって集客に繋がって行くことになる。

◇委員長
ありがとうございました。申し訳ありません。時間が過ぎているので、本当に今日はお忙しい中貴重なご意見を聞かせていただきありがとうございました。これをもちまして、文化・芸術活動団体の皆さんとの貴重な意見交換を終了させていただきます。本日のご意見を参考にさせていただいて、プランをとりまとめて行きたいと思います。本当に長時間ありがとうございました。

議題がのこっておりますので、次第にそって第２回策定委員会の経過についてお願いしたい。

◇事務局
では説明させていただきます。前回は、鳥取大学の野田教授のご後援をいただいた。詳しくはお手元にお配りした資料をご覧ください。

◇委員長
何かお気づきになりましたら、連絡いただければと思う。それから、事務局からアンケートについてお願い致します。

◇事務局
それでは、アンケートについてですが、お手元にございます今日、八つの団体の皆様からいただきましたアンケートですが、これにつきましては県の芸術・文化振興会議のメンバーで、主に大分市を拠点として活動している約１００団体近くあると伺っております、それと本市の芸術・文化関連施設をご利用していただいている市民団体と併せまして、今後２００団体程度を目途にアンケートを集計して参りたいと考えている。その結果につきましては、今後の委員会の中でお知らせして参りたいと思う。以上です。

◇委員長
アンケートについて何か質問はございますか。

◇委員
先程、今日来ていただいた皆さんにもあったと思いますが、各ジャンルによってアンケートの内容がはたして統一したものでよいのかどうか、一度ご検討いただければと思う。

◇事務局
検討をさせていただきたい。集計をする関係で、最低限合わせなければならないとこと、そうではないところが若干少し今日の話でも思いましたので、もう一度調整をしたいと思う。

◇委員長
他に質問が無ければ、次回の日程についてお話下さい。

◇事務局
次回の日程ですが、別紙の策定委員会・施設視察候補一覧をご覧下さい。
次回は、８月２２日木曜の午後、前回アンケートをとらせていただきまして、この日に関連施設の視察を予定しております。時間の関係で、４箇所程度の施設の訪問を予定しております。
訪問先の候補につきましては、そこに書いております「ホルトホール大分」、「大分市美術館」、「大分市地区公民館」、「豊の国情報ライブラリー」、「iichiko 総合文化センター」等を考えている。視察ということで、先方の都合もありますことから、4 箇所と調整がつかなかったための補欠となる候補地をご協議くださるようお願いしたい。

◇委員等
今、５つの候補とその他として、どこも見たほうがいいというものの、これは４箇所に絞るのでしたら行かなくてもよいのではないかというのがあれば、ぜひこの施設をみたほうがよいといったところの名前のあがっているところ、あがっていないところのご推薦があれば教えてください。
この場で決めるところまでは行かないと思いますが、ぜひみたいところなどがあれば、ご意見いただければ、調整してもらう。

例えば、「ホルトホール大分」と「iichiko 総合文化センター」県立と市立の違いはありますが、内容的に少し似ているというような見方もできると思う。特に民間の施設のようなところを視察先に入れたほうが良いというようなご意見もあると思いますが。

◇委員
その他の方で、どこか見たいところはないか。ということですが、先方との調整もあるということなので事務局にお任せしてはどうかと思いますが。

◇委員長
それではそのようにいたしたいと思います。何かございましたら事務局にご連絡

を下さい。
その他全体について何かございませんか
特にないようですので、これをもちまして、第 3 回策定委員会を終了いたします。
どうもお疲れ様でございました。